

主 題：福音はわが誇り 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章17節

ローマ1：16-17を見ましょう。

「16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。17 なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」

前回、私たちはパウロが福音を大いに誇っていたその理由を学びました。なぜ、彼はそのように福音を誇っていたのでしょうか？「福音は…信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」と16節にある通り、それがパウロが福音を誇っていた、福音を恥としていない理由でした。すなわち、パウロは福音を信じる者には救いが与えられることを確信していたのです。この福音のメッセージを信じる者には神が救いをくださると言います。その証拠を私たちは三つ見てきました。

☆福音はなぜ信じる者に救いをもたらすのか

1. 神のメッセージだから

人間のメッセージではないのです。

2. 神が罪人に与えた救いを得る唯一の方法だから

人間が作り出した方法、人間が考え出した方法ではなく、神ご自身が私たちに与えてくださった方法です。

3. 救いの保証があるから

この救いは神が保証しておられます。

福音は全能なる神の救いの力であると見てきました。全能なる神が救いを成してくださる、どんなことでもできるお方だからできるのです。不可能があるお方ならできないことです。罪の赦しも人間にはできません。どんなに立派な聖人と呼ばれる人でもできないこと、神にしかできないことです。そして、みことばは私たちにはっきりと、全能なる神によって救いが与えられる、神が罪の赦しを与えてくれると教えています。ですから、その福音を信じる人は国籍や人種に全く関係なく、必ず、救いに与るということを見たのです。パウロは同じように、1コリント15：1-5で福音の説明をして、このように言います。「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私^があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、5 また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。」、キリストの十字架と葬りと、そして、その死よりの三日後のよみがえりです。これが私たち罪人を救うために神が成してくださったことであり、この救いのみわざを受け入れることによって、よく考えて心から受け入れるなら、この福音のメッセージを信じることによって救われる、福音によって私たちは救われるのだと言います。

ローマ1：17を見てください。皆さんに注意していただきたいことは、16節から17節へパウロのメッセージの展開です。16節の最初には私たちが見ている新改訳聖書では「なぜなら」という接続詞が記されていません。原語にはこのことばがあります。ですから、16節の初めは、「**なぜなら、私は福音を恥とは思いません。…**」と、このようにパウロは言うのです。このように彼は伝えたいのです。ですから、この16節のことばは明らかに15節のことばに関連しています。15節のことばを受けて16節が続くのです。この16-17節を見て行くと、彼は語ったこと^の理由を述べながら話を展開しているのです。というのは、15節で「**ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。**」と、ローマにおいて私はぜひ福音を伝えたいと言って、その理由を彼は16節の初めに記すのです。「**なぜなら、私は福音を恥とは思いません。…**」と、私はこの福音を誇りとしているから、自慢にしているからと言います。そして、その後また、なぜそうなのかという理由を説明するのです。なぜ、パウロがそれほど福音を誇りとしていたのか、なぜ、彼は福音を恥としていなかったのでしょうか？「**福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**」と言います。そのことを知っていたから彼はローマにいる人々にも、すべての人々にこの福音を伝えたいと思ったというのです。17節を見ると、最初にまた、「**なぜなら、**」という接続詞が出て来ます。ですから、パウロは福音を私の誇りと思っている、それはこの福音が信じるすべての人に救いをもたらす神の力だから、

では、なぜ、福音が信じるすべての人に救いをもたらす神の力なのか、そのことを17節で説明するのです。

☆なぜ、福音が信じるすべての人にとって救いを得させる神の力なのか？

私たちがこのことを知ることによってより強い確信をもつことができます。願わくは、皆さんがこのみことばを学ぶことによって、確かに、福音を信じることによってすべての人は例外なく救われるのだという、その確信をもっていただきたいのです。なぜ、福音が信じるすべての人に救いをもたらす神の力なのか、その理由は、

1. 福音を信じる者に神の義が与えられるから

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて」とあります。「神の義が啓示されている」とは言い方を変えると、神の義が与えられるから、福音によって信じるすべての人に神の義が与えられる、それがパウロが言う理由なのです。当然、私たちはこの「神の義」とは何なのかを考えなければいけません。簡単に言うなら、これは「救い」のことを言っているのです。確かに、「神の義」というとき私たちは神のご性質を考えます。聖書を見ると、神は正しいお方である、つまり、「義なるお方」であるということが何度も記されています。たとえば、申命記32：4には「主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」とありますが、ここで「正しい方」と訳されていることばが「義」と訳されていることばのヘブル語です。ここで使われている「正しい方」ということばを、私たちは今ローマ1：17で「神の義」、「義」ということばに見ているのです。また、詩篇145：17でも「主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。」と記されています。同じことばが使われています。ですから、みことばは私たちに神は正しいお方、神は義なる方だと教えているのです。しかし、パウロは明らかにここで神のご性質について教えようとしているのではないのです。なぜなら、ローマ1：16でパウロは救いのことを話しました。「福音は、…信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と。そして、17節になると、確かに「救い」ということばはありません。代わりに、「神の義が啓示されている」と言います。こうして見て来たように、話は展開しているのです。明らかなことは、確かにことばは違っても、パウロが言わんとしていることは、この福音のメッセージによって、信じるすべての人は間違いなく救われる、義とされる、正しくされると、そのことです。ジョン・マレーという神学者は「救いを知らせることと義を示すこと、または、義の表示とは並行表現であって、本質的には同じ思想を伝えていることは明らかだ。」と述べています。故に、私たちが17節で学ぶことは「救い」のことです。ですから、この「神の義」というとき、私たちがしっかり覚えておくべきことは、これは救いのことを言っているのだということです。それだけでなく、この「神の義」は「神から与えられる義」であるということです。イエスを信じる人に与えられる神の義のことを言っているということを私たちは忘れてはいけません。言い方を変えると、神の前におけるキリスト者の新しい身分のことです。神の前に神によって罪人が「義」と宣言される、そのことをパウロはここで私たちに教えようとするのです。

今、私たちが見ているこの16-17節のみことばは非常に大切なところです。このことが繰り返してこのローマ人への手紙の中で記されています。宗教改革を行なったルターはこのみことばによって生まれ変わるのです。このみことばがその宗教改革の力となりました。ルター自身、この「神の義」ということばの意味がよく分からず悩みました。ある日突然、彼は神の啓示によって、このみことばの意味が「神の報復の処罰」ではなく「義が神の主権的恵みによって罪人に無償で転嫁される」ということが分かるのです。「義」が神によって与えられた信仰により、罪人自身の所有とされたことが分かったとき、彼自身はこのように言います。「私は人生最良の日を経験した」と。このローマ1：17は信者に対して下された神の恵み深い義の判決を教えているということが分かったとき、彼は大いに喜んだのです。どういう意味なのか？カルヴィンはこのように言っています。「これは神の法廷で是認されることだ」と。神学者のエリクソンはこう言います。「旧約聖書では法廷と法律との関連で義の概念が頻繁に出て来る。正しい人とは裁判官が「罪なし」と宣言した人である。裁判官の仕事は罪を犯した人に有罪を、罪のない人に無罪を宣告することである。」と、今、このような人々の話を上げましたが、パウロが言っていることは、丁度、私たちが神の法廷に立っているとして、判決を下すのは裁判官です。裁判官がイエス・キリストを信じる私たちに対して「この人は無罪である」とそのように宣告する、そのことです。それが「義と認められる」ということなのです。そのような救いを、神は信じる一人ひとりに与えてくれるとみことばは教えるのです。ですから、裁判官が被告を無実とするときのように、神が罪人を義と宣言すること、これが「義」と記されていることば、「義と認められる」という神の大切なみわざの意味がそこに含まれているのです。

皆さんに考えていただきたいことは、神は私たち罪人に対して、すなわち、すべての人間に対して「義」

を要求されています。完全な正しさを要求されます。しかし、私たちは残念ながらその義を持ち合わせていません。生まれながらにそれを持っていませんし、私たちが努力をすることによって神が要求されているような正しさ、完全な正しさを手にすることができるかという、皆さんも経験されたように、不可能なことです。そのことに私たちが気付いていなければ、私たちはこの神の恵みを感謝する者にはならないのです。私たちはいつも自分の力ですべてのことをやろうとします。それほど私たちはプライドの高い者です。できると信じたいしできると思い込んでいるのです。ですから、救いに関しても、一生懸命努力すれば、一生懸命頑張れば、もう少し意志を強くすればと…。しかし、私たちが気付かなければいけないことは、どんなにあなたが意志を強くしようと、どんなにあなたが努力しようと、あなたは神が要求されている完全な正しさ、聖さに到達することは絶対にないということです。神の基準は余りにも高いものです。私たちにある希望は、神がその要求を取り下げてくださるか、それとも、神がその要求に合った義を与えてくださるかしかありません。生まれながらの人間に課せられていることは、神の要求に応えられないから、神の前から取り除かれること、さばかれることです。なぜなら、神がしなさいということをしなかったから、神がこのように生きなさいということを守らなかったからです。ですから、私たち人間が救われる唯一の道は、神が要求されているその要求を神ご自身が取り除かれるか、または、神がその要求に私たちに代わって応えてくださるしかないのです。もし、神がその要求を取り下げたとするなら、それは神が神でなくなったことを意味します。神は聖い方であり、正しい方で、しかも、それは永遠に変わることがないので、その神が罪を認めるということは有り得ないことです。神ご自身の選択によって神の聖さが汚されてしまうことになるわけです。神は聖い方ですから、どんな罪も受け入れることができません。だから、神なのです。どんなに小さな罪も容認することはできないのです。もし、そうするなら神のご性質を変えたことになります。聖い方でなくなるのです。ですから、残された可能性は一つだけです。それは、神が私たちに要求される義に対して、神ご自身がその義を私たちに与えてくださることしかありません。そして、そのことを神はもうすでにしてくださったのです。クリスチャンの皆さん、今、あなたが神の前に立つことができるのは、あなたの功績、働きではないのです。あなたにはできない、あなたが到達できない、どんなに努力しても手にすることができない義を、神ご自身が一方的に与えてくれたのです。「救い」についての驚くべきことは、神があなたのすべての罪を取り除いてくださって、罪を赦してくださって、神があなたに要求されている完全な義を神ご自身があなたに転嫁してくださったということです。だから、私たちは聖い神の前に立つことが赦されたのです。聖い神の前に私たちはいつでも自由に出ることができる、そのような身分をいただいたのは、神のあわれみによるのです。ですから、私たちが覚えなければいけないことは、こんなにすばらしい祝福を神が一方的に私たちに与えてくださったということです。私たちは日々の生活において、どれほど罪深い者であるか、どれほど愚かな者であるかということに気付きます。私たちは余りにも罪深い者です。考え方において私たちはいかに利己的であって自分のことしか考ないか、神を愛すると言いながら、私たちは自分のことを優先します。神を賛美しながら次の瞬間には平気で罪を犯すのです。それほど弱い愚かな私たちです。なぜ、このような私たちが聖い正しい神の前に立つことができるのでしょうか？それは一方的なキリストによって為されたあの贖いのみわざのゆえに、信じる一人ひとりに、そして、信じた私たちにこの「**神の義**」が与えられているからです。

ジョン・マレーはこのように言います。「この義は神の義である。そのような者であるので、神が創始者なのである。それは神によって必ず是認される義である。それは神の正義のすべての要求を満足させる義であるので、神の御前で役に立つ義である。」と。私たちは今、そのことを学んでいるのです。神の前に立つことは私たちの努力では不可能です。神の一方的なあわれみによってそれが可能となったのです。なぜなら、私たちのもっている義ではなくて、キリストの完全な義が私たちに与えられているからです。ですから、この義は神から与えられる義です。信じる一人ひとりに与えられる神の義のことです。これは神からの一方的な贈り物であるということがみことばの中に記されています。17節を見ると、「**福音のうちには神の義が啓示されていて**」と記されていますが、この「**啓示されていて**」ということばは面白い時制を使っています。その前に、「**啓示する**」とはどういう意味でしょう？辞書では「明らかに表わして示すこと、よく分かるように表わし示すこと」とあります。そして、「**啓示されていて**」という動詞が現在形で記されているというのは、そのように人々の前にこの福音が明らかに表わし示され続けていること、この福音のメッセージがよく分かるように人々の前に表わし続けていること、つまり、私たちクリスチャンによってこのメッセージが継続して宣べ伝えられていると、そのことをパウロは教えているのです。なぜなら、2000年前も、今と同じようにイエス・キリストを信じた人々はこの福音のメッセージを人々に伝え続けたのです。パウロもこの福音のメッセージを伝え続けた、彼は人々にこのすばらしい救いのメッセージを明らかに表わし示し続けたのです。その当ても、多くのクリスチャンたちが機会を探って神が開いてくださるその門戸を通して、願わくは、この福音を世界中に伝えようとして

いたのです。同時に、この動詞は受身なのです。「神の義が啓示されていて」と受身で記されています。つまり、この「啓示」は実は神の働きであると言うのです。面白いことを言っています。確かに、私たち救われた者たちはこの福音のメッセージを携えて出て行きますが、実際に、このメッセージが人々に理解される、そのためには神の働きが必要だと言うのです。皆さんご存じのように、この「啓示」というのは「人の力では知り得ないことを神が教え示すことである」と辞書にはそのように定義されています。「人間の力では知ることでできない真理を、神が神ご自身、または、天使などの超自然的存在を介して、人間に伝達することである。人知では分からないことを神が表わし示すことである。」と、そのように辞書が教えます。私たち救われた者は出て行って福音のメッセージを伝え続けて行きます（現在形）。ところが、神がその人たちのうちに働いて真理を彼らに理解させてくださる、人間の力では理解できないこと、知り得ないことを神が教えてくださる、だから、神の働きなのです。神が悟りを与えるのでなければ理解できないのです。私たちもそうでした。福音のメッセージを聞いても聞いてもなかなか理解できない、でも、ある時に私たちはそのメッセージが分かるのです。神が私たちにその真理を悟らせてくださるからです。ですから、パウロは面白いことを言うのです。クリスチャンはメッセージを語り続けて行きます。でも、実際に彼らのうちに悟りを与えるのは神の働きなのだ。ですから、この救い、義とされるという神の恵みは、神からの一方的な賜物なのです。クリスチャンである皆さん、そのことを私たちはしっかり覚えて、そのことを神に感謝しなければいけないのです。神のあわれみが私たちにこのような素晴らしい救いを与えてくれたのです。私たちは神の前に新しい身分が与えられた、聖い者として神の前に立つことが赦されたのです。

「義とされる」、簡単にこの大切な教えをまとめるとこのようになります。人生における一度だけの神の宣言です。神は何度もあなたのことを聖いと宣言することはないのです。神は一度、あなたが罪赦された者として「聖い」と宣言されたならそれで終わるのです。一回きりのことです。この身分は永遠の身分です。神はあなたを赦してくださった、神はあなたを救ってくださった、これは永遠に変わることはない真理です。ですから、義とされた者は決して神のさばきを受けることはありません。なぜなら、イエス・キリストがすべての罪を負って十字架の上で身代わりに私たちの罪のさばきを受けてくださった、罪が永遠に解決した、赦されたのです。私たちは敵対していた神と和解したのです。

また、同時に、義とされた者には約束されている神の祝福が与えられます。それは今見てきたように、私たちの義ではなく、すべての点で完璧であったイエス・キリストの義が私たちに与えられたのです。イエスお一人です。すべての点で神に従われた方はこの人しかいないのです。イエスはただの立派な人間だった、とんでもない、イエスはすべての点で神の要求に100%お答えになった方です。彼のうちには罪がなかった、そこが私たち人間と違うところです。罪を犯したことのない人間はただ一人イエスを除いて存在しません。ですから、彼の義が信じる私たちのうちに与えられるゆえに、私たちは義とされ、義なる神の前に立つことが赦されたのです。永遠を私たちはこの方とともに生きるわけであり、そして、後に私たちはこの罪のからだから解放されて栄光のからだからいただくのです。そのような祝福を神は私たち信じる一人ひとりに与えてくださったのです。このことゆえに、信じるすべての人にはキリストの義が与えられる、だから、「福音は、…信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力」なのです。そのようにパウロは断言したのです。

2. 神の義は信仰によってのみ与えられる

17節の続きを見て行くと、この神の義をどうして得るのかということがまた繰り返されています。「その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」と。パウロがここで言わんとしていることはただ一つです。この神の義というのは信仰によってのみ与えられると、それが彼が伝えようとしたことです。ローマ3章を見てください。20節「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」と、どんなに頑張っても神のおきてを守ろうとしても、自分の行ないをもって神の基準に到達しようと努力しても、人間には不可能だとパウロはここでも教えています。もし、この中に一生懸命努力することによって、良い人間になることによって神の救いに与ろうと思っている方がいたら、素晴らしい知らせをお伝えしなければなりません。あなたの努力では決して永遠に救いに至ることはないということです。21-22節を見てください。「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。：22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」と、今、私たちが見てきた16-17節と似通ったことをパウロはここで繰り返しています。どんな差別もない、どんな人もこの救いに与るといえるのです。何によって？信じる信仰によってです。パウロが強調したかったのはそれです。なぜなら、愚かな私たち人間は、自分の努力でそれを得ようとするからです。パウロが言うこと、この聖書が私たちに教えることは、人間の努力では決して救いには与ることはできないということです。ですから、この

「信仰に始まり信仰に進ませる」というのは、様々な説がありますが、明らかにここで言っていることは、すべて信仰である、それ以外の何ものもないということです。それゆえに、パウロは17節の後半に「**義人は信仰によって生きる**」というハバクク書2：4のみことばを引用するのです。

このハバクク書は何を言っているのでしょうか？わずか3章の書です。ハバククという預言者は南王国ユダの悪い王であったエホヤキムの時代に活躍した人物です。人々は悪を行なってもうまくやればさばかれることなく大丈夫だと、そのように信じていました。そこで、このハバククは神の前に祈るのです。1：1-4を見ると、なぜ、このような悪がはびこり正しい者が苦しむのかと彼は神に問い掛けています。そのとき、1：5-11に神の答えがあります。必ず、悪を行なう者たちはさばかれる、カルデア人によって、あのバビロンの人々によってさばかれる。実際に、この後、バビロンの捕囚が起こります。でも、それを聞いてハバククは納得しないのです。12節から、神さま、なぜ、あなたはカルデア人を使うのですか？私たちユダヤ人の方が彼らよりまだましではないですか？なぜ、私たちの罪をさばくために私たちよりも悪い人たちを使うのですか？とそのような疑問を彼は投げかけるのです。それがこの1：12から2：1まで出て来るのです。それに対して、主のお答えが2：2から出て来ます。神が言われたことは、カルデア人もさばかれる、すべての罪人はさばかれる、しかし、義人、**「正しい人はその信仰によって生きる。」**と4節のみことばがこの中で出て来るのです。だから、その後、ハバククは理解できなくても主を信頼するよにということを、この2：20まで教え続けるのです。そして、3章を見ると、主の臨在を見せて彼を励ますのです。最後には、ハバククが神への信頼の賛美をささげている様子が記されています。

さて、このような中でこのハバクク書2：4のみことばが記されているので、明らかなことは、これは救いのことです。敵から救われることです。では、どういう人々が救われるのか、もちろん、これはイスラエルの国のことですが、敢えて、パウロがこの旧約聖書のみことばを引用して言いたかったことは何でしょうか？どういう人々が敵から救われるのかということです。それは、悪を行なう人々ではなく、神の前に義なる者たちだと言います。**「正しい人はその信仰によって生きる。」**（ハバクク2：4）とあります。そして、ローマ人への手紙の中でパウロは**「義人は信仰によって生きる。」**と言っています。この「**信仰**」ということばが「**義人**」にかかるのか、それとも、「**生きる**」にかかるのか、それもいろいろ議論のあるところですが、しかし、恐らくここでパウロが教えたかったことは、この文の流れを見て行くと、彼が言いたかったことは「**救い**」のことですから、この神の義をいただく、救いをいただくのに必要なことは信仰以外に何もないということです。ですから、**「義人は信仰によって生きる。」**とは、信仰によって義とされた人々が生きるのだと言います。ちょうど、ハバククが神からそのように教えられたように、義とされた人が神の前に豊かな守りをいただくのです。この17節でパウロが言わんとしたことをまとめます。私たちがこのすばらしい神の祝福をいただくために必要なものはただ一つ、信仰だけだと。それが、最初に話したように、ルター、宗教改革者たちが確信をもったことです。信仰によってのみ救われるのだ、これが私たちの確信だと言います。よく皆さんもご存じのように、そのことはみことばの中に繰り返して私たちに教えられていることです。皆さんが一番よく憶えておられるヨハネ3：16でも**「それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」**と、この神の祝福に与るために、救いに与るため、神の前に義とされ、神の義をいただくために必要なことはただ一つ、このイエス・キリストの贖いのみわざ、この救いのメッセージを心から信じる信仰だと言うのです。自分の努力では何も起こりません。**「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」**と、エレミヤ17：9に記されています。箴言27：22には**「愚か者を臼に入れ、きねでこれを麦といっしょについても、その愚かさは彼から離れない。」**とあります。私たちがこの罪に対してどうすることもできないと言うのです。ヨブはヨブ記4：17で**「人は神の前に正しくありえようか。人はその造り主の前にきよくありえようか。」**と言っています。同じ15：14でも**「人がどうして、きよくありえようか。女から生まれた者が、どうして、正しくありえようか。」**とあり、詩篇143：2では**「あなたのしもべをさばきにかけてください。生ける者はだれひとり、あなたの前に義と認められないからです。」**と、みことばが教えていることは、私たち人間はどんなに心を入れ替えて努力しても、神の義をいただくことはないということです。神が備えてくださったこの救いを受け入れる信仰によってのみ義が与えられる、それがみことばが私たちに教えていることです。ダビデは詩篇51：1-2でこのように言っています。**「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をめぐい去ってください。：2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。」**、ダビデがしたことは神の前に助けを求めるのです。救いを求めるのです。赦しを求めるのです。**「神さま、どうぞ、私をきよめてください、私を洗いきよめてください、私の罪を赦してください」と**。神しか私たちに救いを与えることはできません。神の要求されている義に応じるためには、神の義をいただくかなければなりません。それをキリストは私たちのために備えてくれたのです。信仰がそれを私たちにくれるのです。

ルターの福音への理解は詩篇の学びから始まったと言われます。特に、詩篇71：2に「**あなたの義によって、私を救い出し、私を助け出してください。あなたの耳を私に傾け、私をお救いください。**」と記されていますが、ルターはこの学びを始めたことがきっかけだったと言われます。ルターは後に彼が「神の義」という表現を常に嫌っていたことを告白しています。なぜなら、この慣用句は彼に、無力な不従順な男の上にさばきの落雷を投げつける用意している虹の上に座しておられる厳格な裁判官を連想させたのです。「神の義」ということばを聞いたときに彼が連想したのはそのような神だったのです。しかし、詩篇の学びによって、彼は「神の義」は人への有罪宣告ではなく、人の解放に関連していたことを学んだのです。そして、この真理をより明らかにしたのは、ローマ人への手紙の学びだったのです。彼はドイツのヴィッテンベルクでローマ書の講解をするのです。また、その時期、彼はローマ市のラテランの聖ヨセフ教会にある大理石でできた28段の階段をひざまづいて上っていたのです。その階段はイエス・キリストがポンティオ・ピラトのさばきを受けるときに上った階段だと言われるもので、ローマに持ち帰られたのです。多くの人々はそこをひざまづいて上ることによって、そのような行ないによって救いを得ると思っていたのです。彼もそう信じていて、そのように教えていました。人の内側におけるある変化やいやしが神によって義と認められる必要条件であると。ところが、ローマ書を学んでいるうちに「そうではない」ということに彼は気付くのです。使徒の働きではなくイエス・キリストの仲介的働き、彼の死、彼の葬り、彼の復活によることを悟るのです。そして、イエス・キリストの救いのみわざを信仰によって受け入れるなら、人は解放される、なぜなら、真実な神は信じるすべての人に神の義を無償で提供することができるからだ。それは神ご自身によって備えられたものだから、神によって受け入れられるのであると、そのことに気付いたときにルターは、「私はかつてこの『神の義』という表現を猛烈に憎んでいたが、今はこの新しい神の恵みの概念を激しく抱擁せずにはいられない。そして、私にとってこのパウロの表現は天国への門を本当に開いてくれた。」と言います。彼は分かったのです。ルターは気付いたのです。人間の行ないは決して神の義をもたらすことはない、イエス・キリストを信じる信仰によってのみこの祝福を自分のものにすることができるのだと。

皆さん、これが神のすばらしい救いのメッセージです。あなたがどんなに努力してもあなたの努力では得ることのできないすばらしい救いを神は備えてくださった、このイエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰によって、あなたはそれをあなたのものにすることができるのです。これが一人の人物を変えました。教会を変えました。そして、私たちはこの神の真理に立って、この真理を語り続けて行かなければいけないのです。信仰は神の義を得る唯一の手段です。ラテン語でソーラフィデー(Solafide)と言います。これが宗教改革者が掲げたモットーでした。信仰だけ、信仰だけだ、信じる信仰だけだと、それが神のメッセージなのです。